

地域情報（県別）

【群馬】全国でも珍しい嗜癮問題の治療に注力する精神科病院が生まれた理由-竹村道夫・赤城高原ホスピタル院長に聞く◆Vol.1

2020年3月13日 (金)配信 m3.com地域版

アルコール依存症や薬物依存症、摂食障害、窃盗症といった「嗜癮問題」の対応に注力する珍しい病院が群馬県渋川市にある。1990年に竹村道夫氏が開業した赤城高原ホスピタル。院長の竹村道夫氏は、特に窃盗症の治療に詳しく、今までに診てきた患者とその疑いのある人はおよそ2000人。窃盗症の治療を行う医療機関は全国でも少数という。なぜこのような特徴を持つ病院が生まれたのか。竹村氏が精神科医を志した経緯から辿った。（2020年2月10日インタビュー、計3回連載の1回目）

▼第2回はこちら

▼第3回はこちら

——まずは、赤城高原ホスピタルの概要についてお聞かせください。

当院は1990年に開院した精神科病院で、111床の病床を持ちます。精神疾患の中でもアルコール依存症や薬物依存症、摂食障害や窃盗症の治療に注力しているのが特徴で、実際に来院・入院される患者さんが抱える病気としてもこれらが中心です。

1日の外来患者数は30人ほどで、現在の入院患者数は90人ほど。通常は100人くらいが入院されているので、今はちょっと少ないですね。患者さんはおよそ男女半々で、多くの方が先に挙げた4つの病気のうち複数を合併しています。あえて単一の病気に区切って多い順を挙げるとすれば、アルコール依存症、窃盗症、摂食障害、薬物依存症になります。各病気における性別と年代の傾向について、アルコール依存症は中年男性が、薬物依存症はそれより若い20、30代の男性が多く、一方の摂食障害は大半が女性です。窃盗症も女性の方が多い傾向にあります。

在籍するスタッフは約100人で、医師は私を含めて10数人、うち常勤医は6人です。



竹村道夫院長

——精神疾患の主要でない領域に対応していて、さらに窃盗症の治療も行っているのは非常に珍しいですね。先生はそもそもなぜ、精神科医を志し、また精神科病院を作ろうとしたのですか？

私は高知県の出身で、自宅のすぐ前には大きな精神科病院がありました。入院している患者さんの多くは統合失調症を抱えていたようですが、状態が落ち着いている人たちは作業療法の一環として私の家の庭仕事などを手伝ってくれていました。家を出れば年中患者さんと顔を会わせる環境ですから、自然と私も患者さんと仲良くなって一緒に運動をしたり、遊んだりしていました。「精神疾患の患者」というと抵抗感のある人もいるかもしれませんが、私は子どものころからそんな環境で育ってきましたから、「普通の優しいお兄ちゃん」といったイメージ。思えばそんな経験を重ねてきたことが、精神科医を志す理由になったのかもしれない。

精神科病院を作ろうと思ったのは、診療が好きだったためです。私は1972年に大阪大学医学部を卒業して帝京大学医学部の精神科に入局し、研修修了後も勤務していました。医局員の仕事は主に「診療」「研究」「教育」の3つがあ

りますが、自分が最も好きだったのが診療だったわけです。大学に引き続きれば診療だけをしていけばいいというわけにはいきませんから、開業して診療に注力しようと考えました。

ではどう開業するか。私の4歳上の兄、竹村紀夫も精神科医であり、群馬病院で院長を務めていたので、彼の協力を得て群馬県に精神科病院を作ろうと思ったのです。



病院の外観

——なるほど、お兄さんとの絡みで群馬とのつながりが生まれたと。それにしてもなぜ、現在のような珍しい特徴を持つ病院になったのでしょうか。

元を辿れば、精神科医の斎藤学（さとる）先生に師事し、一緒に働いたことがきっかけです。斎藤先生は当時の日本で「最も嗜癖（依存）問題に詳しい医師」として関係者には知られた存在でした。一般の方でも耳にしたことがあると思われる「アダルトチルドレン」や「共依存」の概念を国内に広めたのが斎藤先生です。

当時の私の知識と経験から見れば、アルコール依存症の患者さんは治療の難しい方が多く、まあ、医者も手を焼いている状況でした。周囲に悪態をついたり、ほかの精神疾患の患者さんからお金を巻き上げたりする上、肝心の治療もなかなかうまくいかない。多くの精神科医が敬遠しがちでした。そんな中で、私は大学病院に勤務しながら東京の診療所で斎藤先生と働いたわけですが、斎藤先生は、実に独創的かつ画期的な治療で患者さんを回復に導いていたんですね。このことを知った私は「アルコール依存症の人でもきちんと治療すれば立派に回復するのだな」と驚き、彼にその手法を教わりました。その診療所にはアルコール依存症だけではなく薬物依存症や摂食障害の患者さんもいましたし、また患者さんの中には私のような若い医者を教育してくれるような回復者もいましたから、この分野の治療にのめり込んでいきました。

——そんな経緯があったのですね。それで、こういった病気の治療に注力する病院を作ろうと。

はい。1989年から群馬病院の常勤医として働きながら、経営の才覚があった兄の助言を受け、開業の準備を進めました。

当時、群馬県では精神科の病床数が多かったために一般的な精神科病院は作れない状況でしたが、入院対象をアルコール依存症に絞れば新設が可能でした。ちょうどそのころ、アルコール依存症の患者が酔って電車の中で乱暴を振るうなどの事件が社会問題になっていて、行政としても対応を求められていたのです。それで、1990年にアルコール依存症の専門病院として赤城高原ホスピタルを開設することができました。

◆竹村 道夫（たけむら・みちお）氏

1972年大阪大学医学部卒。帝京大学医学部附属病院に勤務する傍ら、アルコール依存症などの嗜癖問題の第一人者である精神科医の斎藤学氏に師事、同問題の総合的な治療方法を学ぶ。1990年に赤城高原ホスピタルを開院。アルコール依存症や薬物依存症、摂食障害や窃盗症の治療に力を入れる。窃盗症の治療を行う医療機関は全国でも少数。

【取材・文・撮影＝医療ライター庄部勇太】



